

# 日本の戦争展示博物館の歴史と諸問題の整理

大参 翔平\*

## はじめに

1945年8月15日、日本がポツダム宣言を受託し第二次世界大戦は終わりを迎えた。それから70年以上経った今日、世界大戦の体験は歴史記憶と変化しつつある。戦争を体験した世代、戦争を体験した親から伝え聞いた世代、伝え聞いた親からさらに伝え聞いた世代、というように世代を跨ぐごとにその経験は薄くなっていく。日本ではこの70年近く大きな武力衝突は起きておらず、平和な時代を享受しているように感じられる。しかし、世界には大小さまざまな紛争・衝突が依然として起きている。2022年2月にロシアがウクライナへ進攻し、戦争が続いていることは記憶に新しい。このような状況下において、世界でおきている紛争・戦争を対岸の火事とせず捉え、戦争の悲惨さ・恐ろしさを後世に伝える必要性がより求められるようになってきている。その手段として博物館が存在するのだ。世界大戦の経験が薄くなっていることに関して次のような考えがある。「歴史になるとはその時代を支配してきた空気のような価値観から人々が自由になり、その時代を突き放して見るができるようになることである。つまり、同時代人＝体験者には見えなかったことが、次第に見えてくる」という[山田2001]。今日の博物館は体験から歴史記憶へと変化しつつあるもの捉える機関としての役割も担うべきであろう。

続いて本稿で扱う戦争展示に関する博物館の種類について確認する。戦争展示とは戦争

やその被害についての文献・絵・写真・芸術品、軍隊・兵備についての資料、戦時下の生活に関する資料、戦跡を指す。日本では戦争博物館、平和博物館、軍事博物館がそれに該当する。『博物館事典』によると、戦争博物館と平和博物館はほぼ同義として扱われており、戦争の悲惨さと平和の尊さを伝えることを目的としている。軍事博物館は軍事に関する展示をし、軍隊の発展に貢献することを目的としており、欧米に多く見られるかたちである。前者の2つは相反する言葉でありながら同義として扱われていることは何とも皮肉なことだが、総じて3つとも戦争展示を対象としているという点では共通している。そこで本稿では戦争博物館、平和博物館、軍事博物館をまとめて戦争展示博物館と定義し論を進めていく。

## 1 日本における戦争展示博物館の成立と研究史

日本における戦争展示博物館の流れを確認する。まず戦争展示博物館が必要とされる背景には、「戦争の悲惨さを語り継ぐことにより、戦争を否定し、平和を尊いと考える国民的感情が形成されていったこと。同時に戦争が軍部の独裁により遂行され、拡大されていったことから、戦争を防ぐ意味でも、民主主義が大切であるとする考えが定着していった」ことがある[山辺2004]。

日本における最初の戦争展示博物館は、戦前・戦時中にかけて誕生したといわれてい

\*明治大学大学院文学研究科臨床人間学専攻博士前期課程

る。自国の戦争を賛美したり、戦死者をたたえ、国民を戦争に動員することを目的とした軍事教育のためのものであり、軍隊や地方公共団体によってつくられた。前述した「戦争博物館」としての性格がそのまま当てはまることから、当時の日本における戦争展示博物館は今日の欧米諸国の戦勝国に多く見られるものと近いと考えられる。これらの博物館は戦争末期・戦後に閉鎖された。

終戦直後には、平和のための戦死者を讃える博物館が神社、自衛隊、個人によってつくられた。しかしながら一般公開していないものが多く、この時期の戦争展示博物館が日本の博物館全体に及ぼす影響は小さなものであった。この時期の主流は地方自治体による戦争の悲惨さと平和の尊さを伝える「平和資料館」としての意味合いが強いものであった。

一方で大戦中に大きな被害を受けた地域には現在まで続いている博物館やそれらの前身となるものが誕生した。1949年には広島平和記念資料館の前身である原爆資料展示室が、1955年には長崎原爆資料館の前身である長崎国際文化会館がつくられた。沖縄戦に関しては、両原爆の戦争展示博物館から20年遅れて1975年に沖縄県立平和祈念資料館が、1989年にはひめゆり平和祈念資料館がつくられた。展示内容は原爆や沖縄戦というその地域に直接関係するものに限定されており、第二次世界大戦を全体としてとらえようとしたものではなかった。

戦時中に大きな被害を受けた地域というと都市部の空襲も当てはまるが、空襲関係の戦争展示博物館の設置は遅れていた。1981年に仙台市戦災復興記念館が、1988年には浜松復興記念館がつくられた。

ベトナム戦争が起きアメリカ軍によるベトナム北部空爆が激しくなると、これに呼応するように1960年代後半から1970年代にかけて空襲を記録する市民と地方自治体の運動が盛んになった。その結果、空襲展といえるよ

うな企画展・特別展が、大阪国際平和センターの前身である大阪府平和祈念戦争資料室や高知県の平和資料館草の家などでつくられた。東京の江戸東京博物館の一部のスペースでは東京大空襲の展示が取り入れられたが、財政難と右翼団体の攻撃により中断してしまった。

これまで述べてきたのは原爆、沖縄戦、空襲といった特定の戦争被害に関するものであったが、1980年代に入ると戦争を総合的に扱った展示がつくられ始める。都市部で平和のための戦争展運動が機関紙協会、労働組合、生協、平和友好運動団体、市民、教員などによって行われた。運動内容は被害・加害、反戦・抵抗など、戦争を広い視点から展示する努力を重ね、期間限定の展示を行うことであった。

一方、都市部の戦争展運動とは別に、1980年代半ば以降、地域の歴史博物館の特別展・企画展で世界戦争に関する展示が試みられるようになった。この時期には非核都市宣言などがなされ、平和と民主主義が左翼扱いされることが少なくなり自治体で平和を課題とすることが可能になったからだという[山辺2004]。地域の戦争やその被害から平和を考えるという観点による企画展・特別展が行われた。この時期の特徴として生活史に着目するようになったものが多いことが挙げられる。

1990年代にも引き続いて、地域博物館で世界大戦に関する企画展・特別展が開催された。特に戦後50年の1995年には100を越える地域歴史博物館で企画展・特別展が行われた。地域博物館や歴史博物館に地域研究・調査、資料収集・整理の蓄積があったことが要因となり、最終的にこの時期には第二次世界大戦を対象とする総合的な戦争展示平和博物館が開設された。

## 2 戦争展示博物館をめぐる論争

日本における戦争展示博物館は企画展・特

別展は1980年代から、常設展示としては1990年代から日本各地で開設されてきた。しかし、戦争展示博物館はその展示内容から政治団体、戦争遺族、自由主義史観あるいは個人から様々な批判・抗議を受けることがあり、展示を巡る論争が度々起こりうる。展示内容への批判・抗議は戦争展示博物館に限らず他の分野の博物館でも起こりうることであるが、ここでは日本における戦争展示博物館やその展示内容を巡る批判・抗議・論争を年代順に整理する。

1999年に開設した昭和館は国設民営の戦争展示博物館である。ここでは計画段階において、「反戦記念館など不要」という意見や「アジア諸国への加害を表象するものが皆無」というような双方向からの批判を浴び、展示の背景にある歴史認識をめぐる激しい論争が起きた。そこで、展示内容を協議していた厚生省(当時)の委員会では次のような認識を示した。「先の大戦について歴史認識に相違のある今日、歴史展示事業としての戦争を客観的に展示することは困難」である。その結果、戦争に関する歴史事実の展示はせず、戦中・戦後の国民生活上の苦労を伝えるという展示形態となった[君塚2003]。

1998年に開設した神奈川県立の地球市民かながわプラザ(あーすぷらざ)では、従軍慰安婦に関する展示を一部の県議会議員の反対で中止する事件が起きた。戦争の被害とアジア諸国への加害の両面を展示理念に掲げていた大阪府・大阪市が開設した大阪国際平和センター(ピースおおさか)では、日本による加害に関する展示に対する激しい批判が展開され、展示内容の一部撤去や修正が行われた。ヨーロッパにおける虐殺やアウシュヴィッツ収容所などを扱っていた日本では珍しい戦争展示博物館であったが、大阪府と大阪市の政治的転換が博物館への財政支出の大半を停止するという圧力をかけ、2015年に大幅リニューアルを迎えると、大阪大空襲を

中心とした戦時中の大阪を扱う展示へと変化した。つまり開設当初の理念の半分しか展示していないということである。

1996年にリニューアルした長崎原爆資料館でも、加害展示の全面撤去を求める団体から南京大虐殺に関する展示について批判が行われた。

1999年、東京都では東京都平和祈念館(仮称)の建設が東京都議会議員や自由主義史観に立つ研究者、戦争遺族などから寄せられた批判によって凍結するということがあった。批判側の主張は、展示内容は自虐的、審議経過が不透明、さらに計画立案の背景に左翼団体の結束があり秘密裏に建設計画がすすめられたというものであった。

同年に沖縄県立平和祈念資料館で展示改ざん事件が起きた。事件発生以前の展示は日本兵の沖縄住民に対する加害行為を表象するものであった。しかし、展示制作を担う沖縄県が日本兵の加害性を弱める展示に変更し、沖縄県民から反発を呼び問題となったのである。後に当時の県知事の政治的意向が強く反映されていたことが明らかになったが、沖縄県による展示表象を通じた歴史改ざんの一端が見えた事件であった[君塚2009]。

2006年には埼玉県立平和資料館で従軍慰安婦を巡る修正問題が起きた。発端は埼玉県議会定例会において議員が「展示内容が偏っていないか」と質問したところ、「慰安婦はいても従軍慰安婦はいない」と当時の知事が答弁したことにある。この発言を巡って発言撤回を求める抗議が届き波紋を広げ、韓国の団体を巻き込むまでになった。結果として常設展示導入部分の年表パネルにおける「従軍慰安婦問題」の文字が「戦時中の「慰安婦」問題」と修正されたシールが貼られることとなった。

2010年には国立歴史民俗博物館で新たにオープンした常設展示室において大きな論争がおこった。現代史における沖縄戦の集団自決のパネルに「軍の関与」の文言を明記する

かどうかを巡ってのことであった。

以上の戦争展示博物館をめぐる批判・抗議・論争の原因は政治団体、自由主義史観の人々、戦争遺族によるものが多数を占めている。ここで注目すべき点は、特定の政治団体・個人が自身の歴史観から展示を自虐史観に偏りすぎていると非難しているだけではないということだ。遺族からすると戦時体制を全否定することはそのために国のために尽くした人々をも否定する可能性があることを認識しておく必要がある。

### 3 戦争博物館の理想の展示形態

戦争展示博物館は批判・抗議・論争を引き起こすことを確認してきた。その結果として展示内容の変更を余儀なくされたり、開館そのものが中止となることもあることはこれまで述べてきたとおりである。それでは批判・抗議・論争を引き起こすことがないように、可能な限り特定の政治的あるいは歴史観に偏らず、中立の観点から展示を展開するべきなのであるか。戦争展示博物館に理想の展示形態があるのかを考えてみたい。

中立の観点による展示であれば批判・抗議・論争は起きにくいと考えられるが、博物館展示の中立に関して次のような主張がある。「『展示』とはみせる行為とみる行為が、どこかある一点で制度的に整えられて、ある政治的な意義を持ちはじめた時点で成立してきた語であり、概念である」[松宮、2009年]。「展示は中立的で客観的なものではなく、特定の意図をもって作りあげられたものであるという前提のもと、展示のメッセージを顕在化させ、明示するように努めたい」[吉田2014年]。「展示というものは、ある一定の解釈や意図に基づいて構成されるため、価値のコントロールが不可避に組み込まれているという宿命がある」[金子2003年]。これらの意見から博物館の展示が中立であることは戦争展示博物館に限らずほぼ存在しないと

いいだろう。

では戦争展示博物館の展示の中立が限りなく不可能とするのであればどのような展示形態が求められるのだろうか。理想の1つの形として双方向からの展示があると考え。双方向からの展示とは、日本は世界大戦において原爆や空襲、沖縄戦といった侵略された被害の側面と、アジア諸国を侵略した加害の側面を有しており、その両面を含めた展示を指す。君塚は「日本において戦争記憶における加害事実の隠蔽・否認の傾向が露骨に出てきている今だからこそ、歴史事実に基づいた展示内容の構築、加害の側面を正面に見据える形での展示表象を作り上げていく必要がある」と述べている[君塚2003]。さらに「日本を含むアジア諸国における戦争博物館の展示内容を互いが知り合い、学び合い、批判し、研究しあえるような空間作りが急がれなくてはならない」と続けている。展示品数やパネルの分量、展示スペースの広さがそれぞれ同じ程度に展示されているのではなく、分量を別として被害の側面と加害の側面を展示していることが重要である。

### おわりに

世界大戦の終結から70年以上が経過した現在、戦争を直接的にだけでなく間接的にですら経験したことのある人々は少なくなってきた。つまり世界大戦の体験は歴史記憶へと変化しつつあるのだ。体験から歴史記憶への変化は、戦争の悲惨さや恐ろしさを生きた証言として伝え聞いていくことが困難となることを意味する一方で、戦争を当時の価値観から切り離し客観的な視点から、さらに一国だけではなく多角的な視野から捉えなおす良い機会にもなりうる。このような状況において戦争展示博物館は戦争の悲惨さや恐ろしさを後世へと語り継ぐ役割と新たな視点からの研究・展示をする上で重要な役割を果たすと期待される。

戦争展示博物館は時に批判・抗議・論争を引き起こすが、大戦中の日本の被害の側面と加害の側面をどちらも展示する、日本だけではなくアジア諸国で国を跨いだ歴史観や展示などの新たな戦争展示博物館の形態が期待される。

## 参考・引用文献

### 著書

- 犬塚康博『反博物館論序説』共同文化社、2015年
- 金子淳『博物館の政治学』青弓社、2001年
- 「歴史展示の政治性―「歴博」の前身・国史館計画の事例をもとに」
- 『歴史展示とは何か歴博フォーラム歴史系博物館の現在・未来』アム・プロモーション、2003年
- 剣持久木『越境する歴史認識 ヨーロッパにおける「公共史」の試み』岩波書店、2018年
- 竹沢尚一郎『ミュージアムと負の記憶―戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』東信堂、2015年
- 松宮秀治「展示と政治」『展示の政治学』103-149頁、水声社、2009年
- 小島道祐ほか『歴史展示のメッセージ』アム・プロモーション、2004年
- 竹沢尚一郎『ミュージアムと負の記憶 戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』東信堂、2015年
- 山田朗『歴史修正主義の克服』高文研、2001年
- 吉田憲司『文化の「発見」驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店、2014年
- 剣持久木「戦争博物館の最前線」巻頭言
- ベッケル著、臺丸訳、兼清順子コメント「戦争博物館から戦時の社会の博物館へ、国際比較によるアプローチ」4-34頁
- 清水亮「公立戦争博物館における教育・観光の分業と兼業」57-77頁
- 「特集戦争記憶と戦争博物館」『軍事史学』錦正社、第57巻、第4号、2022年
- 全日本博物館学会『博物館学事典』雄山閣、2011年
- 歴史教育者協議会編『平和博物館・戦争資料館ガイドブック』青木書店、2004年

### 雑誌論文

- 安斎育郎「日本平和学会と平和博物館の連携と可能性」『立命館平和研究』第15巻、21-32頁、2014年
- 馬原潤二「現代ヨーロッパ軍事博物館の政治理論的考察のために―その比較考察のためのいくつかの前提整理―」『三重大学教育学部研究紀要』第72巻、147-172頁、2021年
- 金子淳「戦争観の形成と戦争展示：「熱い論争」と「冷やかな無関心」という落差をめぐって」『静岡大学生涯学習教育研究』第4巻、13-24頁、2021年
- 君塚仁彦「日本における戦争記憶の表象を巡る諸問題―戦争博物館における展示を中心に―」『東アジア教育文化学会年報』第1号、59-64頁、2003年
- 剣持久木「公共史のすすめ―書物・映像・博物館をめぐって―」『東海大学史学』第54巻、1-18頁、2020年
- 小森真樹「ミュージアム研究における「展示の政治学」論の系譜―受容論的転回と展示の詩学―」『立教大学博物館研究』第63巻、1-20頁、2017年
- 斉藤比出治「『戦後』を問い直す―ピースおおさか裁判と歴史認識をめぐる社会闘争』『大阪産業大学経済論集』第19巻、第3号、57-77頁、2018年
- 千野香織「戦争と植民地の展示―ミュージアムの中の「日本」」『越境する知1 身体―よみがえる』東京大学出版会、2000年
- 福島在行・岩間優希「〈平和博物館研究〉に向けて―日本における平和博物館研究史とこれから―」『立命館研究』2009年
- 村上登司文「平和博物館と軍事博物館の比較」『広島平和科学』第25巻、123-143頁、2003年
- 山辺昌彦「日本の平和博物館の到達点と課題」『平和博物館・戦争資料館ガイドブック』歴史教育者協議会編、青木書店、2004年
- 山本剛「平和博物館における戦争記憶の展示―立命館大学国際平和ミュージアム」と「大阪国際平和センター・ピースおおさか」を事例に―」『朝日大学教職課程センター研究報告書』第15号、63-85頁、2007年
- 吉村智博「博物館における表象行為と社会的差別：差異の表象をめぐって」『人文學報』100号、113-127頁、2011年

# History and problems of ‘War Exhibition Museum’ in Japan

SHOHEI Ohmi

Today, over 70 years have passed since World war ended. And, the war experience has changed into the memories. Therefore, ‘War Exhibition Museum’ has started assuming institution of the memories. There are many ‘War Exhibition Museum’s which treat regional and comprehensive history of war in Japan. Some of them court controversy, criticism and protest. As result, ‘War Exhibition Museum’ is forced to change their exhibitions. In this paper, I will introduce the history of ‘War Exhibition Museum’ in Japan, the controversy of them, and consider ideal form of ‘War Exhibition Museum’.